

「セミシグレ」 山口県立山口中央高等学校演劇部2024年度上演作品

作者 榊井 春香（山口中央高校 2 年）

上演 山口県山防地区演劇発表会 最優秀賞・創作脚本賞・舞台美術賞
山口県高等学校演劇大会 優秀賞第一席・創作脚本賞

あらすじ 大会が一か月後に迫った演劇部の部室。3 年生のルイは脚本が書けず苦しんでいた。前年度に鮮烈な作品で脚本賞を受賞したルイには皆から大きな期待がかけられていたのだ。部活や大会に対してそれぞれ思いをもつ部員たちだったが、やがて大きくすれ違っていく。

登場人物 12 人(男3、女9)

上演許可を得るための連絡先 asakawa.miyoko.tg@m.ysn21.jp

第四十三回山口県高等学校演劇大会

上演4 山口中央高等学校

セミンシグレ

榊井
春香
作

2024.10.20 版
(県大会上演用)

登場人物

ルイ(3)

演劇部の脚本担当。無口だけドプライドが高く、自分の意見もちやんと持っている。いかんせん感情を言葉にするのにためらいがあるだけである。

アカネ(3)

ルイに圧倒的な信頼を置いているが、それがプレッシャーになっていることに気づいていない。部のまとめ役。

イオリ(2)

他人の気持ちに配慮するという選択肢がない、なんでもあけすけに話す。年度初めの台本競争でルイに脚本担当を奪われる。

チヒロ(2)

事なかれ主義。自分の意見はなく、部活は仲間内のたまり場。音響担当。

ユキ(2)

美術専門の裏方担当。舞台製作においては蚊帳の外。アカネに便利に使われていると感じていることもあり不満を抱えている。

タクミ(2)

欠席やリモート参加が多いが、その理由は不明。デリケートな可能性もあるため誰も触れていない。その配慮もむなしく、本人は案外ズケズケと部活に口を出してくる。

エマ(1)

昨年の大会を観て演劇部へ。ルイを筆頭とするこの部に憧れて入部したが、理想とは程遠い現状に不満がある。

カレン(1)

ルイオタク。一方通行な愛情を向けては跳ね返される。ルイを肯定し続けたいが、実際のところルイのことを理解できてはいない。

ルイ一世
ルイ二世
ルイ三世 } ルイの脳内の人格

男 ルイの書いた台本の登場人物

真つ暗な中、うるさいほどのセミの鳴き声。

うっすらと明かりが演劇部の稽古場を浮かび上がらせる。

廊下から近づいてくる談笑。

ドアの開く音。廊下からの光が差し込む。人影。

ユキ うわ、あっつ！

イオリ 誰だ、暗幕まで閉めたの！

アカネ 開ける！死ぬ！あとエアコン！

ユキ、暗幕を開ける。（明転）イオリ、リモコンに駆け寄りスイッチを押すが、

イオリ 「集中管理中です。現在このリモコンからは操作できません」？

エマ あー今週のエアコン使用申請出し忘れたって顧問が言っていました。

アカネ あのやろー！（大暴れ）

イオリ 余計暑くなるからやめてください。窓窓！

暗幕も窓も開けたらしい。

四人 はふーーーっ

アカネ 生きかえ、ラナイ！あつうー！

アカネ、地団駄を踏んで暴れる。
と、紙がばらばらと床に散らばっているのに気づく。

アカネ なにこれ。

拾い上げると突然、声。

ルイ 触らないで。

アカネ え？

ルイ さわらないで。

声の主も床に転がっている。

ユキ なにやってんすか、ルイ先輩。
実験。

イオリ は。

ルイ じゃなきや体験。

アカネ え、何を。

ルイ 死体の気持ち、考えてた。

ユキ 台本のネタ集めっすか。

アカネ え、今回そんなダークな場面あんの？

エマ 死体は考えませんよね。死んでるから。

イオリ 蒸し風呂殺人事件。

ユキ むしろ自殺行為だな。

アカネ むしろ、むしろ？うまい！

ユキ いえいえ。

ルイ なぜだ。

アカネ いや、聞いているの私らだから。

ルイ それ。
アカネ は。
ルイ それ。
アカネ これ？

ルイを除いた四人、散らばる紙に目が留まる。

エマ 台本。

アカネ 顧問に提出したの？

ルイ 突き返された。

ユキ うわあ……。

ルイ なぜだ。

イオリ 書き込みの一つもなけりや読んだ形跡すらない。

エマ 折り目もしわもないですね。

ユキ いい加減だからなあ、あさかわ。

イオリ 読んでいいですか。

ルイ ダメ。

ルイ、床の紙を拾い集める。と集めるそばからアカネが奪って読む。

ルイ、浮かない顔。

アカネ (読みながら) 顧問、なんだって？

ルイ 「ありきたり。ドラマがない。」

ユキ バツサリいきますねえ。

アカネ まあ、でもみよこは無駄に顧問歴長いし、劇作のコツみたいなのはよく知ってるんじゃない。

イオリ けちけちしないでそのコツを伝授すればいいのに。

エマ 生徒の自主性を重んじるって言っていました。

アカネ 出た。苦しい時の言い訳。

エマ 逃げましたね。

ルイ でも正論。これは駄作。

ユキ　で今、先輩はこの部屋閉め切って、ありきたりじゃない設定を考えてたってことつすね。
アカネ　「稽古場蒸し風呂殺人事件」の？

ルイ　いや、

エマ　（聞いていない）えー、それ絶対に嫌です。面白くなさそう。超絶ダサくないですか。

アカネ　冗談だって。

ルイ　あの、

エマ　だって私、最高にいい台本で絶対に県大会行きたいんです。いや、中国。ううん、全国！

イオリ　エマは演劇やりたくてうち入ったんだっけ。

エマ　はい。私、全国大会目指してます。だから先輩、さっさといい台本書いてください。

ユキ　お前、本当に一年か。

ルイ、大きいため息をついて再び寝転がる。セミの鳴き声だけが響き渡る。

アカネ　行き詰ってるねー。

イオリ　この暑さじゃしかたないです。休憩しましよ。頭冷やしたらいいアイデアも浮かびますよ。

エマ　でもールイ先輩が書き始めてかれこれ…3か月ですよ。本当に大丈夫ですか。

ユキ　今それ言う？

エマ　別に厳しいこと言ってるんですよ。事実です。

アカネ　うんうん。エマはよくできた1年だ。

エマ　せんばーい、頼みますよ。「台本は絶対私に書かせてください」って、自信満々に熱くプレゼンしたじゃないですか。

ユキ　ルイ先輩にしては口数多くて、みんなびっくりしたあれね。

エマ　です。しかも多数決でぎりイオリ先輩をかわして獲得した執筆権ですからね。

イオリ　そうですよー。

ユキ　アカネ先輩は最初からルイ先輩を推してましたよね。

アカネ　ルイなら私らを県大会に連れてってくれるって信じてるから。

エマ　でも完全に詰んでますよ。

ユキ　ちよっと黙ろうか。

アカネ　ほかに案ないの。

イオリ　ルイせんばーい。

ルイ ない。
イオリ 大会まであと一か月ですよ？
アカネ あー、とりあえず今日の部活始めよう。
ユキ えー、今日休みにしません？ 暑いし台本ないし。
アカネ ひとまず台本は置いとく。
エマ またですか？
イオリ そうやって置き続けてもう二週間は経ってますよ。

ルイオタクのカレンが入る。

カレン ルイせんぱーい！
アカネ おつかれ。
カレン おつかれさまです。
イオリ ほんとに完成しなかったらどうするんですか？
アカネ 大丈夫。
ユキ 何を根拠に。
アカネ だってルイが書くんだよ？
エマ 理由になってないですけどね。
アカネ ルイは天才だから。
カレン ですよ。カレン、いくらでも待ちますよ。ルイ先輩の世界観、大好きなので。
エマ いくらでもは待てないでしょ。
ユキ まあ焦りは禁物ってことで。
カレン ですよ、ルイせんぱーい！

と、ルイにじゃれつく。

ルイ …。
カレン つれないく〜！ でもそんなところも好き！
アカネ 強火ルイ担。
イオリ 全肯定タイプ。

ユキ とはいえ、することないっすね。
エマ 暇です。

アカネ あるよ。役者は演技磨いて、裏方は裏方の勉強。
イオリ 抽象的すぎ。

アカネ 文句言わない。はい筋トレ、はい発声！

部員 はい。

アカネ ここはルイが書いてるから、発声は中庭ね。
部員 ういーっす。

がやがやと出ていく。

エマ アカネ先輩、今日の練習なんですけど

アカネ いつも通りで始めといて。

エマ あ、はい。え、先輩は？

アカネ ー、あとで追いかける。

エマ わかりました。

エマも出ていく。

アカネ ルイ。

ルイ ーん？

アカネ スランプ？

ルイ どうだろ。なんか、

アカネ なんか？

ルイ 降ってこない。

アカネ 降ってこない。いやあ、さすが天才脚本家。

ルイ 何が。

アカネ 表現が違う。

ルイ 茶化してる？

アカネ ぜんぜん？

ルイ そう。

アカネ え、怒った？

ルイ いや。

アカネ 怒ってるじゃん

ルイ 怒ってない。

アカネ 怒ってる。

ルイ 怒ってない。

アカネ 怒ってる！

ルイ 怒ってない、なんなのこれ。

アカネ わかんない

ルイ (笑って)なにそれ。

アカネ (嬉々として)笑った。

ルイ (スンとして)笑ってない。

アカネ いや嘘だ、絶対笑った。

ルイ 笑ってない。

アカネ でも元気は出てきたでしょ。

ルイ まあそれは

アカネ そうか、そうだよねえ。もう満面の笑みだったもんねえ
ルイ それはない。

ルイ、あからさまに台本を書き始める。

アカネ もういいんじゃない？ 顧問が何言っても貫けばいいじゃん。

ルイ みんなに認められないとダメ。

アカネ 反対意見が一つもないなんてありえないって。

ルイ 限りなくゼロは目指せる。

アカネ ゼロって

ルイ 県大会、行きたいから。

アカネ ルイの台本でね。

ルイはまたパソコンと向き合う。
手持無沙汰のアカネ、ふと見つけたまた別の原稿を手にする。

アカネ ん、なにこれ。

ルイ (振り向かず) え？

アカネ 台本？いつもと字体違うけど

ルイ あ、ちよつと

アカネ、ルイをかわしながら台本を読む。突然動きを止めて

アカネ これだ。

ルイ え？

アカネ いいじゃん。

ルイ ちよつと

アカネ さつすが天才。これ、さっきのボツ台本？

ルイ いや

アカネ 絶対こつちが本命でしょ。さっきのと全然違うもん。さては隠してたな。

ルイ まあ。

アカネ さすがルイ。

ルイ それは

アカネ 書きかけだから見せられないって言うんでしょ？

ルイ じゃなくて

アカネ ごめんごめん、勝手に見ちゃって。

ルイ いやそれは

アカネ でも、同志の私にはちゃんと途中経過も見せてよね。喜怒哀楽は全部共有。

ルイ ごめん

アカネ いやいや信じてたよ。

ルイ ん、ごめん。

アカネ よし、これで大会に向けて進めるー！

アカネ、書きかけの台本を持ってウキウキと部室を出ていこうとする。

ルイ ちよつと

アカネ え？

ルイ どこに持っていくの。

アカネ 印刷。みんなに配らないと。

ルイ それ、おもしろい？

アカネ すっごい面白い！なんか今までと違うよね。新境地ってやつ？

ルイ かな。

アカネ 印刷してくるから、ルイはちよつと休憩してて。

ルイ うん。

アカネは出ていく。ルイ、大きく息を吐く。これまで息を止めていたかのよう。

ルイ はあ。

セミたちは相変わらず鳴き続けている。

ルイ なんて言ってるんだろう。

ドタドタとやかましい足音とともに部員たちが戻ってくる。

カレン ルイせんぱーい！

チヒロ 台本できたってほんとうですか。

ルイ え？

エマ あ、さっき合流しました。

ルイ いやチヒロのことじゃなくて

イオリ もう、ルイ先輩、出し惜しみとかやめてくれませんか？

カレン カレンたち焦らされてたんですから。

ルイ そんなんじゃ、

エマ ついに始まるんですね、今年の作品作り！

ユキ エマ、わくわくしてんな。

エマ 当たり前じゃないですか。わたし一目惚れしたんですから！

ユキ 俺に？

エマ ルイ先輩の台本。

ユキ 少しは乗ってくれよ。

エマ 長年賞から遠ざかっていた弱小演劇部が

ユキ 弱小言うな。

エマ その弱小校が、去年はなんと地区大会で奇跡の最優秀賞。まあ、県大会止まりとはいえ、『創作脚本賞』受賞！だれが思いました？県大会行けるなんて。思わないでしょーだってうちですよ？

ユキ だからそれぜんぜん褒めてないからな。

エマ 私、演劇好きで、中学のころから毎年大会見てきましたけど、絶対入賞はないと思ってましたからね。

ユキ 一年からのデイスが止まらない。

エマ 過去大会の記録も、きれーに真っ白、ノーマーク。

ユキ おまえ、長年のOB OGをひとまとめにしてデイスってるからな。何十年分もの怨念がおつかぶさってくるからな！

チヒロ 確かにすごかったよね、去年の最優秀賞。

エマ ルイ先輩の台本のおかげです。

ルイ いやそんな

カレン 一緒に青春しましょうね、先輩。

エマ で、どんな台本なんですか。

チヒロ ここまで隠してたんですからもうズバツと言っちゃいましょう。

ルイ えっと、その

アカネ いんさーつ完了！

アカネが他をしのぐほどの騒がしさで入ってくる。

エマ 待ってました！

チヒロ 配ります。

アカネが部員に台本を配っていく。

エマ えー、まだこれだけしかないんですか。
イオリ 薄。

アカネ これこれ、作家にプレッシャーかけない。大丈夫だから、大丈夫。

部員たちは各自、時折会話をしながら台本に目を通していく。

イオリ つまりこれ、翻案ものってことですか。
ルイ あ、うん。

アカネ 新境地でしょ。

ユキ ほー。で、翻案ってどこが？

イオリ ほら、ここ。

ユキ ー。ほう、これが翻案という字か。

イオリ 違う、「蜘蛛」。「蜘蛛の糸」

ユキ 何それ。

チヒロ 嘘でしょ。前授業でやったじゃん。

アカネ それは『羅生門』じゃない？

チヒロ あれ？

イオリ ユキ、『蜘蛛の糸』『羅生門』の作者は？

ユキ 福沢諭吉！

イオリ チヒロ。

チヒロ 太宰治？

アカネ それは『走れメロス』。

イオリ カレン。

カレン 芥川龍之介！

イオリ せいかりい。

ユキ え、お前って頭いいの？

カレン 一般常識ですよ。てかちよつと失礼なんですけど。

アカネ ユキ、ちゃんと勉強しなよー。

チヒロ それ私にも刺さる……!!

ユキ ふっ。作者が論吉でも治でも馬之助でも、俺はただせつせと大道具を作るだけだ。

イオリ だから芥川龍之介だって言ってるじゃん。だれよ鹿之助って。

ユキ 馬之助。

イオリ 鹿之助。

ユキ 馬!

イオリ 鹿!

ユキ 馬!

イオリ 鹿!

エマ 馬鹿じゃん!

ユキ はあ?

アカネ 大道具!

ユキ あ、はい。

アカネ すぐに取り掛かって!

ユキ え、もう?

チヒロ 台本もまだ

アカネ いやいや、もう台本の方向性は決まったわけだし、

ユキ いや決まってるけど

アカネ 簡単じゃん、「蜘蛛の糸」でしょ?

ユキ 情報量少なすぎるって。

イオリ それはユキが無知なだけでしょ。

ユキ お前なあ、俺だってこう見えて、

アカネ いーや、いける。ユキならできる。

一同 ?

アカネ うちの大道具番長、大路ユキなら、誰にも真似できない、すっごい装置を作れる。

ユキ それはそうだけど(嬉しそう)

カレン 苗字、大路だったんですか。

ユキ どうも、プリンスユキです。

アカネ よし、今回はルイの新境地だからね。装置も大胆に頼むよ。

ユキ 具体的には

アカネ 最優秀賞とれるような、ド派手で最高なやつ！

イオリ ざっくりしすぎてる。

ユキ なるほど。

イオリ 伝わったんだ。

チヒロ がんばって。

ユキ おー。

アカネ あ、チヒロもよろしくね。

チヒロ え？

アカネ 音響だよ、音響。この台本に合いそうなの探して！

チヒロ 合いそうなの。

イオリ このぺらっぺらの台本からですか。

アカネ ここ（ルイの頭の中）には構想がバツチリありますから！

チヒロ じゃあ、ルイ先輩から細かい発注かけてもらって

アカネ ーや、ルイは執筆で忙しいから、音響主導でいいよ。

チヒロ はあ。

アカネ それに、いろんな人のアイデアが集まってこそその舞台芸術でしょ。化学反応で爆発しようじゃないか。だから、任せた！

チヒロ えーと、

アカネ というわけで、裏方同士いい感じに相談しながら進めといて。

チヒロ わかりました。

カレン じゃあカレンはルイ先輩の癒し担当で。

ルイ 知らない。

カレン ツンデレなところも好き。

ルイ はあ。

イオリ 照明は？

ユキ どうせ来ないだろ、あいつは。

アカネ まあ本番までには来るって。

ユキ、チヒロ、イオリ、エマが作業のため隅で会議を始める。

アカネ 動き出したね。

カレン ですね！

ルイ そうだね。

アカネ 今年も県大会行きたいなあ。

ルイ うん。

アカネ なんなら県大会も突破したいし？

ルイ うん。

アカネ 他の学校もルイのこと警戒してるはずだから油断はできないな！。

カレン え、先輩の可愛さにですか？

アカネ 台本に決まってるじゃん。

カレン そっちな。

ルイ そんな

アカネ でも、ルイだから大丈夫。期待してるから。

ルイ うん。

アカネ で、いつ完成しそう？

ルイ え。

アカネ 今週中には決定台本印刷したいから、明後日までに

ルイ 明後日？

アカネ 役者の練習時間足らなくなるし。

ルイ でも時間が

アカネ つくろう。

ルイ つくれるものじゃ

アカネ 徹夜はルイの得意技でしょ。

カレン お、新情報。

ルイ それはいざという時で

アカネ で、ブラッシュアップするにあたってさ

ルイ うん

アカネ まず登場人物は増やしたい。

ルイ え？

アカネ 今二人でしょ？地味だよ。せめて5、6人は欲しい。

ルイ うちの役者三人だよ。

アカネ いやいや、二役とかできるって。

ルイ そうかな

カレン 先輩が言うならカレンもやりますよ。

ルイ え。

アカネ カレン裏方じゃん。あっち手伝いなよ。

カレン はあい。

カレン、しぶしぶルイのもとを離れて会議へ。

アカネ あと翻案ったって、はつきり言って蜘蛛の糸まるわかりだし。ちょっと単純すぎ？

ルイ だね。

アカネ もっとさりげなく要素を組み込んで、見る人が見るとわかる、知る人ぞ知る、みたいな。どう？

ルイ いいんじゃないかな。

アカネ いろいろ考察してもらえるのがいいよね。あ、二つの世界をいききするってのはどう？極楽から見た地獄

イオリ 地獄から見た極楽、はたまた、

アカネ だったら『蜘蛛の糸』の原作をもっと読み込まないと。たしかに。あ、私、図書室行ってくる！

アカネがまたも軽い足取りで出ていこうとする。会議していた五人が動き出す。

エマ あの

アカネ ん？

エマ ネットで読めますよ。（とタブレットかスマホを出して見せる）

ユキ さっすがー

アカネ よかったね、ルイ！

イオリ （チヒロに）アカネ先輩、暴走気味。

チヒロ （苦笑い）部のエンジンだから。

ルイ ……。

エマ あ、
アカネ ん？
エマ すみません。当然本くらい持ってますよね。
ルイ まあ。
アカネ でもこれだとコピペとか簡単じゃん。
ルイ あ、うん。ありがとう。
エマ いえ。

セミの鳴き声がする。

イオリ あとキャラ立ちが今一つですね。
ユキ キャラ立ち。
イオリ なんか女子二人の区別ができませんか。
エマ 確かに。

セミの鳴き声が少しずつ大きくなっていく。

チヒロ まあまだ序盤だからね。
エマ 序盤での印象付けが大事ですよ。
アカネ おお。
ユキ 女子でも話し方っているいろだよな。
アカネ うん、イオリとルイなんて正反对だし。
イオリ ちよっとそれどういう意味ですかー？
アカネ 深い意味はないよ。

セミの声に会話がかき消される。
照明転換。部員ははける
ルイの脳内。複数のルイ。

ルイ1 ルイは天才だからね

ルイ3 いやいや持ち上げすぎだよ
ルイ2 でもすごい盛り上がりってるね
ルイ1 だってこんなに頑張ってるんだから、ルイ(自分)が。
ルイ3 ルイ(自分)だって！
ルイ1 原動力はルイだし
ルイ3 暴走を防いでるのはルイだもん
ルイ1 ルイのほうが
ルイ3 いやルイが
ルイ2 ルイとルイとルイなんだからみんな頑張ってるって。
ルイ1 そうそう
ルイ3 先に言いだしたのはそっちじゃん。
ルイ2 まあまあ
ルイ1 あーあ、もつとはやく見せればよかった。
ルイ2 なにを？
ルイ1 台本。
ルイ3 だって怖いもん
ルイ2 なにが？
ルイ3 また突き返されるかも
ルイ1 大丈夫に決まってるじゃん
ルイ2 うーん
ルイ1 証明できたらいいよね。
ルイ3 証明？
ルイ1 ルイは天才だって。
ルイ2 なんのために？
ルイ1 納得いくかも
ルイ3 え、何が？
ルイ1 天才だって。
ルイ3 ルイが？
ルイ1 うん
ルイ2 堂々巡り。

ルイ3 無理でしょ。ルイなんだから。
ルイ1 意味わかんない
ルイ2 納得いってどうするの
ルイ1 もっとたくさん書く。
ルイ2 台本を？
ルイ3 なんのために？
ルイ1 書きたいから。
ルイ3 なんで？
ルイ1 好きだから？
ルイ3 いやどうかな。
ルイ2 なんてだろう
ルイ3 でも書かなくちや
ルイ2 すごいのを書かなくちや
ルイ1 すごいって言ってもらえるのを
ルイ3 誰が言ってくれるの
ルイ1 みんな
ルイ3 みんなって誰
ルイ2 みんな
ルイ1 あれ？
ルイ3 あれ？
ルイ2 何？
ルイ3 何を書きたいんだっけ？
ルイ1 なんて書いてるんだっけ？
ルイ2 なんてだろう。
ルイ3 誰にも分からないか
ルイ2 分からないね
ルイ1 わかんないわかんない

セミの鳴き声がオーバーラップして、次第にコロスの声が聞こえなくなる。
脳内のルイたち、消える。

ルイ　なんて言ってるんだろう。

数日後。ルイはいつものごとく真っ暗な部室の隅にいる。手元には製本した台本。セミの鳴き声がかすかに残っている。それをかき消すように部員たち（アカネ、イオリ、チヒロ、エマ）、いつものようににぎやかに部室へ。

チヒロ　それで昨日夜中まで盛り上がっちゃってー
イオリ　はやく寝なよ……。あつっ！

イオリがエアコンをつける。

アカネ　ルイ、
カレン　あ、おつかれさまです。
アカネ　えっ。

ルイ　えっ。
カレン　え？

ルイ　いつからいたの。
カレン　先輩が来る前です。
アカネ　こわいこわいこわい。

エマ　ずっと隠れてたの。
カレン　まさか。存在消してただけ。
イオリ　より怖い。

アカネ　オタクもここまでくるとすごいな。
イオリ　出禁でしょ。
ルイ　アカネ。

アカネ　ん？
ルイ　台本できた。

アカネ　ほんとに？頑張ったねえ！
ルイ　うん。
エマ　ついにですね！
チヒロ　お疲れ様です。

ルイが台本を手渡していく。
ユキがスマホをいじりながら入ってくる。

ユキ　ちわーっす。
アカネ　ユキ、部活中はスマホ禁止。早くしまつて。
ユキ　あ、いや。タクミからです。
アカネ　え、タクミ？ 久しぶりじゃん。
カレン　タクミ(つて知ってる)？
エマ　？(いや知らないけど誰だろ)
ユキ　はい。読みまーす、『今日つて参加してもおけ？』
イオリ　その言い方なんか腹立つ。(と、ユキに暴力)
ユキ　やめっ
アカネ　返信してあげて。
ユキ　ういっす。

ユキは返信をする。

エマ　イオリ先輩、タクミつて誰ですか。
イオリ　え、会ったことないっけ？
エマ　聞いたこともないです。
カレン　右に同じくでーす。
チヒロ　あれ？
ユキ　どうした？
チヒロ　一年がタクミ知らないつて。
イオリ　アカネ先輩、ちゃんと話してくださいよ。

アカネ ごめん。

ユキ (数えて) つかあいつ、三か月来てなかったのかよ。

イオリ 今年になって部活来てなかったわ。

アカネ え、学校には？

チヒロ けっこう来てますよ。週三くらい。

アカネ 学校ってそんなホワイトだったっけ？

エマ それでタクミというのは

アカネ ああ、二年生の男子。大会とかには来るけど、普段はほとんど部室に来ない。けど所属はしてる。

カレン いわゆるユーレイですか。

アカネ ちよつと違うかなあ。

エマ え、そんなんで部長というんですか。クビにすればいいのに。

チヒロ まあ人手不足だから。

カレン なんて来ないんですか？その人。

ユキ さあな。

エマ さあつて。

アカネ 個人の事情に首突っ込むのもあれだし？

ユキ クビだけに？

アカネ ちなみに照明担当ね。

ユキ 無視は違うくないすか。

エマ え、照明？

カレン なに？

エマ 去年の照明、綺麗だったなあつて。

ユキ あー、本番に強いっつうか、なんかうまくやるんだよなあ、あいつ。くそつ。

チヒロ めらめらしてるね。

イオリ ねえはやく読み合いたいんだけど

ユキに電話が来る。

ユキ もしもし？

アカネ スピーカーにして。

ユキ
らじや。

ユキはスピーカーボタンを押す。

タクミ ユキ？

一同 久しぶり／初めましてエマです／去年の照明担当って本当ですか／今年も照明やんの？

タクミ は、え、何言ってるか（わかんない）

一同 スピーカーにしたから／久しぶりって言ったのよ／先輩の照明素敵でした／ルイ先輩担当のカレンです／

一同 あんたさっさと部活きなさいよ／無理しなくていいよ（などなど一時にしゃべる）

タクミ これ、なんの罰ゲーム。

アカネ 久しぶりだねえ、タクミくん。

タクミ アカネ先輩……、おひさしぶりです。

イオリ 今日は参加するの？

タクミ その声は、イオリ？

イオリ 覚えてたか。

タクミ そこまで頭悪くないぞ。

ユキ ちよっとは気まづい素振りでも見せろよ。あ、見えないか。

タクミ はいはい。気まづいんで今日はリモート参加です。

イオリ あっそ。

チヒロ あ、新入部員入ったよ。

タクミ そうなの。

エマ 一年のエマです。よろしくお願いします、タクミ先輩。

カレン 同じく一年のカレンです。

タクミ あ、はい。ども。あの、敬語とか大丈夫なんで、ほんと。そのもうほんとに、はい。

ユキ コミュ障爆発。

タクミ 黙れナルシスト。

アカネ じゃれ合わないの。

イオリ 先輩、はやく読み合わせやりたいんですけど。

アカネ ああ、タクミには後で送るから今は聞いていて。

チヒロ 私、送ります。

タクミ おつけいです。
アカネ じゃあやろうか。いい？ルイ。
ルイ うん。

台本を広げる。一ページ目を読んだアカネ、すごい勢いでページをめくっていく。

アカネ え？

ルイ なに。

アカネ あ、もうルイってばー。

ルイ え？

アカネ これ、印刷間違えてるってー。

ルイ いや

アカネ 頼んでたやつとちがうじゃん。『蜘蛛の糸』じゃないよこれ。

ルイ 合ってる。

アカネ え？

ルイ だから、これで合ってる。

アカネ いや、

ルイ 新作。

イオリ 新作？

ルイ 昨日書いた。

アカネ どういうこと。

ルイ 今年はこれでいく。

アカネ なんて。

ルイ 昨日徹夜で書いたから。

イオリ 会話になってないんですけど。

ユキ え、なんか急展開？

ルイ 急に変えてごめん。でも『蜘蛛の糸』はやらない。

イオリ まだアカネ先輩の質問に答えてないですよ。

エマ ルイ先輩、せめて理由くらい

ルイ やらない。

カレン
ルイ先輩。

ルイは返事をしない。重苦しい空気。それを無遠慮に破るタクミ。

タクミ あの一、今年はそんなに上目指す感じじゃないんですか？

チヒロ え？

タクミ いや、これ、今ざっと読みましたけど、全然面白くないんで。

ルイ は。

タクミ 心が動かないというか。

チヒロ しみじみした作品、てこと？

タクミ いやぜんぜん。まあルイ先輩も受験生ですもんねー。

イオリ なにそれ。

タクミ 地区大会でさっさと引退して受験勉強、みたいな？

アカネ 県大会には絶対行く。そうでしょ？ルイ。

ルイ うん。

タクミ これじゃむりでしょー。

チヒロ もう一つ書いてたのがあるんだよ、ね、ルイ先輩。

タクミ それ面白かったの？

カレン 『蜘蛛の糸』の翻案です。

アカネ そっちで行こうってみんな決めてた。

タクミ あーはいはい。その一よくわかんないですけど『蜘蛛の糸』のほうが希望あるんじゃないですか？

ルイ なんてわかるの。読んでないのに。

タクミ シンプルな名作をベースにした方が物語の構造が明確っていうか、

チヒロ あー、タクミがなんか難しいこと言ってるなあ。

ユキ つかもう舞台装置作りはじめちゃったけど

アカネ そうじゃん！チヒロも音源探してるでしょ。

チヒロ え、まあ、

アカネ だから今さら変更なんて無茶だつて。

カレン でもせっかくルイ先輩が書いてきてくれたんですし、

エマ 読み合わせくらいしません？

チヒロ そうだね、ひとまず読んでみて
イオリ 時間の無駄。あと何日だと思ってるんですか。
アカネ ルイ、もう余裕ないんだって。
チヒロ 余裕ない中、ルイ先輩も時間割いて書いたんですし、
アカネ お願いだからしっかりしてよ！

皆がルイの返答を待っている。

ルイ やり直せばいいんですよ。
チヒロ 先輩、ひとまずこれ読み合わせるんで、
アカネ やらないよ。

チヒロは黙る。今度は皆がアカネの次の言葉に注目している。

アカネ 今度こそ『蜘蛛の糸』の続き、書いてきてね。
イオリ 去年に負けないくらいに、頼みますよ。
チヒロ そうなのはプレッシャーになるから、
ルイ わかった。

ルイ、台本を投げ捨てて

ルイ 徹夜で仕上げてくる。
カレン あの、先輩
イオリ カレン。(いいから)

ルイは部屋を出ていく。気まずい空気だけが残る。

ユキ じゃ、俺、大道具作って来ます。

ユキは大道具を制作している裏へ。

イオリ なんてこのタイミングでまた別の台本書くんですか。意味がわかりません。
チヒロ 空気悪くなるよ。

イオリ なに、事実でしょ。

エマ スランプなんですかね。

イオリ 何それ。

エマ すみません。

イオリ 時間ないの。自分勝手されると困るの。

チヒロ まあ

カレン 疲れてるんですよ、ルイ先輩。ちよっと休んでもらったら

イオリ 甘いよ、そんなの。勝手に徹夜して疲れるとか。勘弁してって感じ。

チヒロ イオリ、きついよー（とイオリの顔色をうかがいながら）

イオリ、視線でチヒロを黙らせる。それを見てカレンも黙る。

アカネ （ため息）

エマ 先輩？

アカネ なんでなんだろう。

チヒロ え？

アカネ おんなじはずなのに。

チヒロ 何がですか。

アカネ 気持ち。ルイと私は同じものを目指していたはずなのに。

タクミ アカネ先輩は勝ちたいんですよ。

チヒロ 演劇に「勝つ」っていう言い方はどうなのかな。

アカネ そうだよ。私は勝つためにやってきた。

チヒロ そうですね

アカネ ルイの台本なら勝てる、って信じてたのに。

エマ 良かったですよ、去年の作品。

アカネ もう限界なのかな。

イオリ やっぱりあたしが書くべきだったんですよ。

皆がイオリを見る。

イオリ あたしだって書きたかったのに。ううん、書けるのに。

チヒロ 私もイオリは書けると思ってるよ。

イオリ あたしならこんなに待たせないし、もっといいものが書けます。過去の栄光なんかにはすがらずあたしを選んでくれてたら

タクミ そんなの後の祭りだろ。

イオリ わかってるけど。

タクミ まあ悔しいよねー。

イオリ は？ わかったような口きかないでくれる？全然来てないくせに。

タクミ イオリぐらいがつがつしてたらそう思うよねってこと。

イオリ なんなの、その言い方。

チヒロ タクミは慰めようとしてて

ユキ アカネせんぱーい。

裏からユキの声。

アカネ なにー。

ユキ 完成しましたよー！

アカネ え、大道具？ 早！。

怪しげな音楽。皆が一つ一つパーツを運んでくる。

組みあがった装置は蓮の花弁で縁取られた台に光背を背負った仏像。

ユキ、満足げに装置を眺めて

カレン すごい、ね。

エマ うん。いろんな意味で。

イオリ なにこれ。

アカネ ユキ。

ユキ はい。

アカネ 何これ。

ユキ 先輩の注文通りです。

アカネ どころが。

ユキ 「蜘蛛の糸」で「ド派手で最高なやつ」です。

チヒロ たしかに。

タクミ あのー。

アカネ (怒りのため息で) あのねー、

イオリ 注文通りじゃないですか。

アカネ え？

タクミ おーい。

イオリ あのぺらっぺらの台本でイメージ膨らませて作れって言いましたよね。

アカネ あれは、

タクミ おおーい。

アカネ 何？(怒)

タクミ (ひるんで) いやあの、何が起きてるのかな、と。すみません。

チヒロ ああ、ちよっと待って。

チヒロ、スマホ持ち上げビデオ通話で装置をタクミに見せてやる。

チヒロ 見える？

画面の先のタクミは吹き出してやがて大笑い。

タクミ (死にそうなほど笑って) ユキ。おまえ、さすがだな。

ユキ わかる？

チヒロ ちよ(と、アカネの顔をうかがいながらユキを止めて)

アカネ ふざけないで。
タクミ (まだ笑いながら) え、なんでアカネ先輩怒ってるんですか？ これ最高じゃないですか。だって、

アカネ、タクミに全部言わせないで通話を切る。

チヒロ 切れた。(アカネも通話も)

イオリ 切ったのよ。

アカネ 今、ユキに聞いてんの。

ユキ え、俺、切られる要素ある？

チヒロ うーん、

アカネ ちゃんと相談してよ。

ユキ いや相談してもどうせアバウトなことしか言われないだろーなって思っ

チヒロ ユキ(それは核心に触れてるからさすがにやばいよ)

エマ すみません。

アカネ なんでエマが謝るの。

エマ 大道具一緒にやってたので。

カレン カレンもーす。

アカネ はあ？

ユキ 俺が頼んだんですよ。今まで一人きりでやってきましたけど、こういうのって役者含めて部員全員でやるも

んじゃないですか。普通。

アカネ 普通？何、私に文句でもあるの？

ユキ いーや？

アカネ ああそう

チヒロ 先輩、ユキは説明してるだけで。

ユキ あ、それと予算はもう全部使っちゃったんで、把握よろしくです。

アカネ はあ！？

イオリ マジ？

チヒロ 大丈夫なの？

ユキ 大丈夫。領収書ばっちりあるから。

チヒロ いや、じゃなくて。

ユキ だからやり直しはききません。

チヒロ えー。(恐る恐るアカネを見る)

アカネ エマたちは知ってたわけ？
エマ 聞いてはない、ですけど。
カレン そんなに使ってるとは。
アカネ どうしてくれるの。
ユキ どうしましょう。
チヒロ え、楽しんでる？
ユキ ぜんぜん。(どう見ても楽しそう)

一同、困ってしまった。

イオリ アカネ先輩。

アカネ なに。

イオリ っつこれにメインにしませんか。

チヒロ は？

イオリ この舞台装置に合わせて、台本を書くんです。

チヒロ 今から？

イオリ 台本はまだない。予算はもうない。時間もない。ナイナイ尽くしのこの状況を打破するには、このいかれた舞台装置からのインスピレーションで、新たに書くしかないです。

チヒロ 本気？

ユキ 今さらっといかれたって言ったな。

アカネ それだ。

エマ え？

アカネ さすがだよ、イオリ！

カレン 先輩？

アカネ そうだよ。台本も白紙に戻ったわけだし。うん、いける。できる！

チヒロ 本気：みたいですね。

イオリ あたしが台本書きます。

ユキ おお。

イオリ ルイ先輩と同じくらい、いや絶対に先輩を超えるもの書きます。
カレン でも、ルイ先輩は

イオリ もう限界でしょ。

ユキ 死体の気持ち、とか言って病んでたなあ。

アカネ うん、これ以上無理させることなんてない。

カレン じゃあこれはルイ先輩のため、つてことですか。

アカネ そうだ、そう。これはルイのためだよ。

カレン いいと思います！

エマ ルイ先輩に連絡しますか？（とスマホを）

アカネ そうだね。

エマ 電話でいいですか。

アカネ よく休むように言つて。

カレン ずるいーカレンが電話するー。

エマとカレン、二人でルイに電話をかける。

イオリ そうと決まれば一気に取り掛かりましょう。

アカネ やばい、急にこれもめっちゃ良く見えてきた。

ユキ ですよねー、やっぱ俺って天才。

イオリ 調子に乗んなよ。

ユキ 冷たいー。

カレン ルイ先輩スマホ切ってるみたいです。

アカネ 徹夜続きで寝てるのかな。後でLINEしとく。

チヒロ 直接のがよくないですか。

アカネ ー、私がなんとかしとく。

カレン じゃあ（とスマホをしまう）

アカネ、イオリ、ユキ、カレンは舞台装置を囲んで盛り上がり始める。

エマは浮かない様子。

ユキ 舞台はある古い寺？
イオリ 渋い。

カレン 時代もの？
ユキ そこを敢えて未来で。

エマ いいんですかね。

チヒロ え？

エマ ルイ先輩。

チヒロ アカネ先輩が大丈夫っていうんだから大丈夫でしょ。

エマ でも。

チヒロ もうこんだけ盛り上がっちゃってるし。

エマ はい。

チヒロ 流れ、流れ。

チヒロも輪の中へ。エマ、納得いかないが輪の中へ。

イオリ いいね、みんな、入りたい要素どんどん出して。

アカネ 登場人物多めでいきたいんだよね。二役とかで。

エマ 二役ですか？

ユキ タイムリープはどう？

カレン ラブストーリーも入れてほしいです。

チヒロ 情報過多だねー。

ユキ タクミにも聞いてみるか。

ユキはタクミに通話をかける。

アカネ これがしゃべりだしたらおもしろくない？

カレン ワレワレハウチュウジンダ。

チヒロ ほんとにどこもやらない舞台だね。

ユキ もしもし？

タクミ はい。

ユキ どんな設定がいいと思う？

タクミ なんの話。

会話は続いていく。

三日後。

部室にはすでにルイとタクミを除いた部員がそろっている。変わらぬ舞台装置を囲んで会話をしている。タクミは通話で参加している。カレンは主を待つ犬のごとく休んでいる。

イオリ で、ここで二人が出会って「誰!？」てなるわけです。

アカネ いいねー。たったの3日でここまでとは順調順調。早く続きが知りたい。

イオリ 今夜中には仕上げます。

ユキ ノってるなあ。

イオリ 当然じゃん。ついに大会であたしの台本が上演されるんだよ。

ドアが開く。ルイが入ってくる。

ルイ アカネ。

カレン、飛び起きていつもの調子で

カレン ルイせんぱーい!!

ルイ うわっ

カレンをほったらかして3日も何してたんですかーもう。寂しかったんだから。

ルイ 何って。アカネ、待たせたけどやっとな本

アカネ イオリがいいの書いてきたの。読む?

ルイ は?

アカネ以外は状況を一瞬で理解する。アカネは続ける。

アカネ 「口占」したじゃん。え、読んでないの？
ルイ 知らない。

アカネ ええ？

エマ 知らなかったんですか。

カレン カレンたちが電話かけなおせば

アカネ いいよ、今説明するから。

ルイ 何が。

アカネ いやまあ色々あってさ。ユキが作ってくれた舞台装置を生かして台本書こう！みたいな流れになって。

イオリ で、あたしが台本やらせてもらうことになりました。

ルイ ちよつと待つてよ。

アカネ ごめんねルイ。早く気づいてあげられなくて。

ルイ なにが

アカネ ずっと辛そうだったじゃん。書きたいけど書けない？みたいな。

ルイ そうだけど。

アカネ だからもう無理しなくてもいいよ。

ルイ 無理なんてしてない。なに、私がアカネの言うとおりに書かなかったから？

アカネ そんなこと言ってないよ。この舞台装置に合わせて、

ルイ なんですぐ言うてくれなかったの。

アカネ え、言ったよ。

ルイ 聞いてない。

エマ すみません。私たち電話したんですけど、つながらなくて。

カレン でもアカネ先輩がLINEしとくって。

アカネ そうだよ。

アカネ、スマホを取り出して見る。

アカネ あ。

皆でスマホを覗き込む。

チヒロ これ、
イオリ 送信できてない。
アカネ なんで。
ユキ いつ送ったんですか。
アカネ あの日の帰りに
チヒロ あ、
一同 ?
チヒロ うちの駐輪場って電波死んでませんか？
エマ 未送信に気づかないで今日まで放置、ってことですか
アカネ どうりで返信ないはず。

ルイは静かに怒っている。皆もそれを感じ取っている。アカネ、空気を破るように

アカネ まあでも、こういうことは直接言ったほうがいいし。

ルイ こういうことって何。

アカネ え？その大事なこと？っていうか報告？

ルイ 事後報告。

アカネ ごめんごめん。

ルイ 大事だってわかってるなら、

チヒロ すみません。

ルイ なんでチヒロが謝るの。

チヒロ ごめんなさい。

ルイ 要は都合悪かったんでしょ。私がいたらできない話だったんでしょ。

アカネ ルイも納得してくれるかなって

ルイ そんなわけないじゃん、

アカネ ルイ疲れてたし、ルイのためにもなるよね、って

ルイ アカネは書いたことないんだからわかるわけないじゃん。

アカネ いや

ルイ 言ったよね。「ルイの台本が必要だ」って。

アカネ 言ったけど

ルイ　ずっとその言葉を信じてた。だから頑張ってた。なのにアカネは簡単に私のこと裏切るんだね。
アカネ　裏切るって、別にそんなつもり
ルイ　ならどんなつもりだったの。
アカネ　……。

ルイ　私抜きで盛り上がったんでしょ。私の気持ちなんて誰も考えようとしなかったんでしょ？
チヒロ　気にはしてたんですよ。

ルイ　でもなにもしてくれなかった。

チヒロ　ごめんなさい。

カレン　先輩、カレンは、

ルイ　カレンも、いつもはルイ先輩、ルイ先輩って言うくせに。

ユキ　あたらないでくださいよ。

タクミ　ちよつといいつすか？

チヒロ　なに。

タクミ　仕方ないんじゃないですか。その時先輩いなかったんでしょ？

ルイ　ああタクミ、いたんだ。見えないからわかんなかった。

タクミ　うわー。

チヒロ　先輩、ちよつと

ルイ　ぜんぜん部活に來ない人に何も言われたくないんだけど。

タクミ　ですよ。俺は発言権ないんで、言われたことだけきっちりこなします。

　　気まずい空気が充満している。

アカネ　あのね、ルイ。とにかく今回はルイに休んでもらって、なおかつ上に行けるように、

ルイ　イオリの台本で県大会行けたって意味ない。

イオリ　は。

アカネ　え、何言ってるの。

ルイ　私の台本じゃなきゃ。

エマ　先輩？

ルイ　イオリの台本に価値なんてない。私の台本がなきゃただの弱小校だったくせに。

イオリ　書いてみなきゃわかんないじゃないですか。

ユキ なるほど。

一同 ?

ユキ ルイ先輩は「自分の台本」にこだわってるわけですね。

ルイ 悪い？

ユキ いや全然。でもそのわりに「盗作」は平気なんですね。

イオリ は？

アカネ 盗作。

ルイ 何のこと？

ユキ 俺、バカなんで『蜘蛛の糸』とか「翻案」とか知らなくて一応調べたんすよ。お？俺って意外と熱心。

イオリ そういうのいいから。

ユキ で、たまたま見つけちゃって。

アカネ なにを。

ユキ ルイ先輩が書いてた『蜘蛛の糸』。

エマ え。

ユキ 演劇の台本公開サイトって結構あるじゃないですか。で『蜘蛛の糸』の翻案作品があって。やっぱこういうのってよくあるよなーと思ったら、なんと全く同じでした。

カレン ルイ先輩がサイトに公開してたとかじゃ

ユキ 作者、男だったよ。

チヒロ 確認したの？

ユキ うん。おんなじゲームしてたからフレンドにもなったし。いやーいい出会い、

アカネ 盗作なの、ルイ。

イオリ 答えてください。

エマ 先輩、違いますよね。

ルイ ……。

チヒロ 有名な作家の有名な短編をモチーフにするってよくあることだし

ルイ オマージュ。

アカネ え？

ルイ だからオマージュ。パクリなんかじゃない。

ユキ ものはいい様ですね。

ルイ ちよっと拝借しただけ。

タクミ それがバクリ、いや盗作なんです。

ユキ 一言一句バクツてるのにオマージュもなにもないっすよ。

イオリ これ以上文句は言えないですよね。

ルイ ……。

イオリ ルイ先輩。台本担当、あたしに譲ってください。というか返してください。

アカネ イオリ

チヒロ なんで今。

アカネ え？

チヒロ ユキ、なんで今ここで盗作の話したの。

ユキ 知ってることは共有しとこうかと。

チヒロ 黙っとけばよかったのに。ルイ先輩に納得さえしてもらえば、イオリの台本で進められるのに。

アカネ いや。盗作なんて絶対に許せない。

ユキ (チヒロに)セーフ。

チヒロ そうだけど。

ルイ ユキは知ってて泳がしてたってこと。

ユキ そんなじゃないけど。

ルイ そもそも勝手にあれ読んで、勝手にこれで行こうって決めたのはアカネじゃん。

アカネ 勝手に？

ルイ 私はダメだっと思ってた、だから隠してたのに。

イオリ 逆ギレですか。

ルイ (イオリを一瞥)

アカネ だったら言ってくれれば

ルイ アカネはいつも全然聞こうとしないじゃん。

アカネ いつも？

膠着状態

タクミ 整理していいですか？

ユキ しゃしゃるなあ。

タクミ 現時点での事実です。イオリの台本は完成間近でその装置も生かせる、ルイ先輩の『蜘蛛の糸』は装置が使

えるかもしれないけど盗作でアウト、てことですよ。もう答えは出てるんじゃないよ。
ルイ ユーレイは黙ってて。

タクミ 聞こうとしないのは先輩も同じですね。

ユキ ユーレイって耳あんのかな。

チヒロ ユキ。

ユキ ん？

チヒロ この火種はユキが撒いたんだから茶化するのはよそうよ。

ユキ あ、やっぱ火種だった？

チヒロ ユキー

ユキ てか事実じゃん。火種ならむしろルイ先輩でしょ。

チヒロ 解決案は

ユキ ねーよ。ぶっちゃけ関係ないし。

アカネ 関係ないってなに。

ユキ 俺は指示通りに大道具作るだけです。台本がどうか相談されたこともないし。

アカネ 前から気になってたんだけどさ、指示がないと何にもしないと、改めたら？

ユキ えー、俺に飛び火するんですか？

イオリ 士気下げてるって話でしょ。ユキもタクミも、チヒロも。

チヒロ え、私？

イオリ タクミはそもそも来ないから論外

タクミ あ、どうも、論外です。

イオリ、スマホの乗っている箱馬を蹴る。

ユキ 痛い！（とタクミの代弁）

イオリ チヒロは自分の意見がないのが腹立つ。

チヒロ 意見は、ないけど。

イオリ 他の人が必死で考えて出来上がったものに乗っかってるだけじゃん。

アカネ そうだよ、私たち（自分とイオリ）がこんなに必死なのに。熱量あげてこうよ、みんな、

ユキ 熱量があっても指示出しがぐだぐだじゃあ意味ないと思いますけど。

アカネ なに、私のこと？

ユキ あ、ばれた？

アカネ は？

チヒロ やめようよ。みんなの楽しい部活じゃん。

イオリ 楽しく遊んでるだけの人は黙って。

タクミ すみませーんユーレイです。論外から失礼します。

イオリス マホをつかんで投げようとするが、ユキがセーブする。

タクミ 論点すり替わってませんか？ 問題はルイ先輩では？

ルイ 来てないくせに。

タクミ 好きでユーレイやってるわけじゃないんです。人のことわかってもしない。そういうところじゃないですか。

ルイ わかってもらおうともしてないくせに。

タクミ それはー（大音量）

大音量に一同ひるむ。

タクミ ここにいる全員がそうじゃないですか。

全員思い当たる節がある。

タクミ 自分が傷つかないように適当に話題すり変えて。当然ですよ、他人より自分のほうがずっとかわいいんですから。

痛いところを突かれた気持ちの一同。と、エマが口を開く。

エマ あの、気になってたんですけど。

注目。

エマ 去年のルイ先輩の作品は「盗作」じゃないですよ？

空気が凍り付く。

ルイ ……。

ユキ その発想はなかったけど、

タクミ それまじくね？

ユキ だよな。

チヒロ いや脚本賞だよ。

ユキ だからこそだろ。

イオリ 盗作が受賞ってまじいよね。

チヒロ それはまあ、かなり。

カレン 何があってもカレンはルイ先輩の味方です。

アカネ どうなの、ルイ。

ルイは深く呼吸をする。

ルイ もう、無理。

セミの鳴き声がある。ルイは耳鳴りに襲われ、座り込む。

アカネ ルイ、

カレン 先輩、大丈夫ですか!?

タクミ 時効だとは思いますがどうなんですか。

イオリ 賞は剥奪でしょ。

ユキ え、道具出来たし俺帰っていい？

イオリ その態度、腹立つ。

ユキ だから迷惑かけないように消えるってんだよ。

アカネ これはみんなで話すべきこと。

タクミ 結局今年のはどうするんですか。

アカネ まずは過去を清算して、

アカネ
（清算して）からだって言ってるじゃん！みんな勝手なことばかり言わないでよ！
イオリ
過去のことなんかより今のほうが大事に決まっています！
ユキ
だから俺もう帰っていい？ここにいてもすることねーだろ。

セミの鳴き声は次第に強まっていき、会話がかき消される。
脳内のルイたちが出てくる。

ルイ3
今、どうなってる。

ルイ1
ちよつと処理が追いつかない。

ルイ3
ルイ、すごく苦しんでる。

ルイ1
なんでこんなに責められてるの？

ルイ3
わかんないよ。

ルイ2
ほんとに？

ルイ3
え？

ルイ2
ほんとにわからない？

ルイ1
なに？

ルイ2
ルイは一線を越えた。盗作は最低な行為。

ルイ1
でもあんなに言われなくても

ルイ3
やっぱダメだったんだ

ルイ1
え？

ルイ3
だからダメだって、絶対にバレるって

ルイ1
わかってたって言いたいの？

ルイ3
そうだよ、ルイはわかってた。

ルイ2
ちよつと

ルイ3
なのに天才だって思いこんでたのはそっちで

ルイ1
そっちこそちゃんと暴走止めてよ

ルイ3
ルイのせいじゃないで

ルイ1
でもルイのせいでもない

ルイ2
もうやめよう。

ルイ3 え？
ルイ2 みんなルイなんだから。
ルイ1 そうだけど
ルイ2 ルイの中で喧嘩したって何も生まれない。
ルイ3 だったらどうすればいいの
ルイ1 わかんない
ルイ3 わかっているのはルイが間違えたってこと。
ルイ1 ルイは天才じゃないの？
ルイ2 分かり切ってたこと。
ルイ1 でもみんな言ってくれて
ルイ3 お世辞に決まってるでしょ
ルイ2 他に何もないからすがってただけ。
ルイ1 ……そんな。
ルイ3 ルイには台本しかない。
ルイ1 才能なんてない。
ルイ2 台本だけがルイの言葉だったのに。
ルイ3 ルイの言葉、みんながわかってくれて
ルイ1 「すごい」って褒めてくれて
ルイ2 楽しくて、嬉しくて。
ルイ1 だからルイの台本じゃなきやいけない。
ルイ3 去年はよかったなあ……。
ルイ2 もう一回だけ……。
ルイ3 やり直したい。
ルイ2 どこからやり直せばいいのかな。
ルイ3 どうにもならなくなっちゃった。
ルイ2 認められたい。
ルイ3 褒められたい。
ルイ1 求められたい。
ルイ3 満たされたい。
ルイ2 愛されたい。

ルイ1 許されたい。
ルイ3 わかってほしい。
ルイ2 気づいてほしい。
ルイ1 届いてほしい。
ルイ123 違う！
ルイ3 ルイは、ルイは、
ルイ2 ルイは、ただ
ルイ1 ただ、みんなと！

脳内のルイたち消えていく。
ルイは変わらず座り込んでいる。その横で涙を流すカレン。

カレン アカネ先輩の嘘つき。
アカネ え？
カレン 先輩言ったじゃないですか、台本担当を変えるのはルイ先輩ためだって。
アカネ うん。
カレン これのどこがルイ先輩のためなんですか。
アカネ それは、
カレン タクミ先輩が部室に来ない理由を知ってる人はいますか。
タクミ え？
イオリ 何の話
カレン いますか。
イオリ 知らない。
カレン じゃあカレンがなんでルイ先輩のことが好きか。
ユキ 聞いたことねーな。
カレン じゃあルイ先輩がどんな気持ちで台本を書いていたのか。
一同 ……。
カレン アカネ先輩。
アカネ わからない。

カレン、泣いてしまつて次の言葉が出ない。

エマ 皆、そうなのかも。

静寂の中、セミの鳴き声が響く。

ルイ はあ、はあ……。

悪夢から目覚めたように荒い呼吸をするルイ。
気づけば部員はいなくなり、電気も消えている。
ルイは立ち上がり電気をつける。
と、台本を読むイオリを見つける。

イオリ ルイ先輩。

ルイ ……。

イオリ 読んでました。

ルイ 返して。

イオリ 「なぜだ、僕は罪など」 (台本を声に出して読む。)

ルイ 返して。

イオリ 「僕たちの罪は一体誰にとつての」

ルイ やめて。

イオリ これ、盗作じゃないですよね。

ルイ え。

イオリ オリジナルでしょ。

ルイ (頷く)

イオリ なんて言わなかったんですか。

ルイ 一度盗作したのは事実だから。

イオリ でもこれは先輩が書いたんですよ。去年のだって。

ルイ 今さら

イオリ 今さらじゃないですよ

ルイ もうみんな聞いてくれない。

イオリ 聞かせるんですよ

ルイ 私の言葉はもうみんなに届かない。

イオリ 『僕たちはこの地獄の責苦を甘んじて受けるいわれはない。

だから皆で考えないか。あの糸を上る方法を、皆で。』

ルイ うまいね。

イオリ 役者もいけるんで、私。

ルイ (啞然とイオリを見ている)

イオリ 台本って自分の気持ちを反映させるじゃないですか。

ルイ ……うん

イオリ これが先輩の気持ちですか。

ルイ ……。

イオリ そりや盗作のことは怒ってます。私の台本に価値がないって言ったことも。

ルイ ごめん。

イオリ でも先輩が嫌いなわけじゃないです。そもそも嫌いになれるほど先輩のこと知りません。

ルイ ごめん。

イオリ 謝ってほしいわけでもありません。

ルイ えっと

イオリ 落ち着きましたか？

ルイ え？

イオリ 気持ち。

ルイ (頷く)

イオリ 帰りますか。

イオリが窓を閉めようとする。

イオリ うわっ！

ルイが見ると、

ルイ
抜け殻。

ルイセミの抜け殻を拾い上げて

ルイは手の中の抜け殻を見ている。セミが鳴く。

ルイ
なんて言ってるんだろう。
イオリ
え？

ルイ
セミ、あんなに一生懸命

イオリ
ただの求愛行動ですよ。オスがメスに居場所を知らせる、みたいな。
ルイ
自分はここにいてるって？

イオリ
まあたぶん。

ルイ
そっか。

イオリ
なんだと思ってたんですか。

ルイ
わかんない。わかんないからずっと考えてた。
イオリ
へえ。

ルイは窓を閉める。

イオリは台本を握りしめている。

ルイ
それ

イオリ
？

ルイ
返して。

イオリ
なんでですか。

ルイ
価値がないから。

イオリ
？

ルイ
価値がないのは私の台本。イオリのじゃない。

イオリ
あたしはいいと思えましたよ。

ルイ
え。

イオリ
天才、だからじゃなくて、この台本はいいと思えました。単純に。

ルイ えつと

イオリ でもこれ、長さ足りてないですよね。

ルイ えっ。

イオリ ネタ切れですか。

ルイ 書きたいこと、いっぱいあるけど、繋がらなくて。

イオリ 『僕たちはこの地獄の責苦を甘んじて受けるいわれはない。だから皆で考えないか。あの台本の続きを、皆で。』

ルイ それ

イオリ オマージュです

ルイ いや、

イオリ ブラックジョークですよ、先輩。

ルイ 怒ってるんじゃない

イオリ 怒ってるからやるんです、忘れないために。

ルイ え

イオリ 痛みを伴うってことです。

ルイ ほんとに、読んだんだね

イオリ ライバルの情報収集です。

ルイ ライバル？

イオリ 執筆権、返すなんて言ってますよ。

ルイ あっ

イオリ あたしは書きたいです。先輩はどうしたいですか。

ルイ 私は、

イオリ ……。

ルイ みんなに読んでほしい。

イオリ そうですか。

ルイ わがまま言って

イオリ はい、座ってください。

ルイ え？

イオリ 読んでほしいんですよ。

ルイ 今？
イオリ 座ってください。
ルイ あ、うん。
イオリ 遠いですね。
ルイ あっ
イオリ いいですけど。

ルイ、少し考えてからイオリの横に座りなおす。
イオリが台本を開くと、やがて舞台は二人が読んでいる台本の世界へ。

重い鉄の扉が閉まる音。続けて水滴の音。
男が出てくる。

男 男は地獄の底の血の池で目を覚めました。男は善良な人間であった。生前盗みを働いたこともなければ、ましてや人を殺したこともない。

どこからともなく罪人たちのうめき声が聞こえ、舞台上に地を這う人間たちが現れる。

男 男は声の限り叫んだ。「何故だ、僕は罪など犯していない。」
しかし、男はただ一度意図せず友人を傷つけたことを、覚えていないだけであった。

きらきらと輝くような音が降ってくる。

男 銀色の蜘蛛の糸がひとすじ、細く光りながら男の前に垂れてきた。糸の先を見上げると、ぼんやりと光っている。「上は極楽か。」男は糸を手繰り寄せ、上へ上へとぼって行った。

うめき声。男は下を見下ろす。

男 男はふと、はるか下でうめく罪人たちが気にかかった。「蜘蛛の糸は細い。今にも切れそうだ。しかし、彼らを置き去りにしてひとり極楽にたどり着いたとて、それで僕は。」

男は自ら手を離し、地獄の底の血の池へと真つ逆さまに落ちていった。

雷の音。打たれたかのように倒れる罪人たち。

男 皆、聞いてくれ。あの糸の先は極楽だ！なあ聞いてくれないか！

声は届かない。うめき声はさらに大きくなる。

男 君たちが犯した罪は何だ。盗みか？殺人か？

罪人たちの声が次第に小さくなる。

男 僕には罪を犯した覚えがない。だがここにいる。皆もそうなのではないか？

罪人たちは黙り込む。水滴の音。

男 僕たちの罪は一体誰にとつての罪なんだ。目に見えるものだけじゃない。きつと僕たちは罪を犯し続けている。

罪人たちは少しずつうめき声をあげる。

男 だから考え続けなければいけないんだ。同じ過ちを繰り返さないために。それがどれほど痛みを伴うことでも。

男、うめき声をかき消すかのように

男 聞いてくれ！僕たちはこの地獄の責苦を甘んじて受けるいわれはない。だから、皆で考えないか。あの糸を上る方法を、皆で！

閉幕